



J.S.バッハ（シトコヴェツキー編）：ゴルトベルク変奏曲（弦楽三重奏版）

《ゴルトベルク変奏曲》は、1741年に《クラヴィーア練習曲集 第4部》として出版された。

「ゴルトベルク」という表題が付けられた由来は、バッハの伝記作家ヨハン・ニコラウス・フォルケルが記した逸話による。バッハは旧知のロシア公使ヘルマン・カール・フォン・カイザーリンク伯爵から、眠れぬ夜に気を紛らすような曲を作してほしいとの依頼を受け、この変奏曲を書いた。伯爵がそれをヨハン・ゴルトベルクというお抱えピアニストに弾かせて愛聴したことから、この通称が生まれたとされる。しかしゴルトベルクがこの難曲を弾くにはまだ若すぎるのでは？（当時、10代半ばだった）といった理由から、この逸話を疑問視する向きもある。

作品全体は、冒頭と末尾に置かれたアリアと30の変奏曲からなる。変奏曲は3つずつの単位で構成され、その最後の変奏はカノンとなっており、カノンの音程は同音から始まり、1度ずつ広がっていく。アリアは16小節ずつの前半・後半からなり、全曲の構成も16曲ずつの前半・後半に分けられ、後半は第16変奏のフランス風序曲から華々しく始まる。このように構成内容もシンメトリックになるよう設計されており、この作品が一つの巨大な建築物に比される所以となっている。ただし、最終変奏（第30変奏）は、カノンではなく「クォドリベット」という、異なった流行の旋律を組み合わせた変奏形式を採用しており、ここでバッハは当時の流行歌2曲を挿入するという遊び心を見せている。

本日演奏される「弦楽三重奏版」は、名ヴァイオリン教師のイヴァン・ガラミアンに師事したドミトリ・シトコヴェツキーが、バッハの生誕300年を記念して編曲し、グレン・グールドの思い出に捧げられている。編曲版の初演は、シトコヴェツキーが芸術監督を務めていたフィンランド・コルショルム音楽祭で1985年に行なわれた。